

課題4
担当
大関信隆

心理学の方法論の一つとしての実験（法）の意味について考察しなさい。

アドバイス

上記の課題から1つ選び下記期限内に提出してください。レポート用紙の表紙の「科目名」右側に担当教員名を、「課題欄」に課題を必ず記入してください。なお、レポートの字数は2,000字程度を標準としますが、16ページめまでを使用し、最長4,000字程度まで記入していただいて結構です（パソコン印字の場合左右40字×30行×4枚まで）。

課題1
解説

スクーリングで詳しいアドバイスをしますが、まず、短期記憶とはどういうものかを確認してみてください。その中から、自分が何を提示刺激にした実験をするかを決めることから始まります。具体的には数字の列、意味のない文字列などが例に出されることが多いですが、いろいろと工夫をしても面白いと思います。

次にそれをどのように被験者に提示するのも決めなければなりません。紙に書かれたものを見せるのか、読んで聞かせるのか、あるいはパソコンをつかってスライドショーのように提示することも可能でしょう。

さて、課題の中心は、短期記憶がいくつくらいまでなら覚えていられるか、ということですから、確実に覚えていられる数（刺激の種類によっても変わりますが3～5くらい？）からマジックナンバーである7をはさんで、覚えているのが無理な数（15以上？）まで、いろいろな刺激数で実験してみてください。ある刺激数を超えると急激に覚えられなくなってくるのではないのでしょうか。そこが一人ひとりの実験でのマジックナンバーになります。この刺激の数が 7 ± 2 になればマジックナンバー7が検証されたこととなります。もし実験の結果がマジックナンバーが 7 ± 2 から大きくずれたら、それがなぜかも考察しなければなりません。

以上の点を押さえた上で、覚えていられる数を増やすという実験を重ねても面白いと思います。例えばチャンクという考え方も有効なのではないでしょうか。

課題2
解説

スクーリング時に配布する資料を参考にまとめてみてください。できる限り正確に判断しようとする時、私たちはどのようなことに気をつけるのでしょうか。

課題3
解説

錯覚現象については、幾何学的錯視以外の錯視、視覚以外の錯覚などがあります。それらについて、単に知識として知るだけでなく、自ら観察あるいは体験してその感想やコメントを述べてください。そして、スクーリングでの説明などを参考に錯覚現象の背後にある知覚の働き（作用）について考え、もしそれらがなかったらと考えてみてください。

課題4
解説

心理学における実験（法）の意義を考える際には、次のような視点を持つことが必要と思われます。すなわち、①：「こころ」という対象に接近していくために、心理学の中にはどのような方法があるのか、②：実験（法）とは、具体的にどのようなやり方を有する方法論なのか、③：実験（法）の特徴や長所は何か、などです。これらのことは、言い換えれば心理学における他の方法論との比較、と考えることができるかもしれません。そうすることで、一層、実験（法）の意義や長所・短所が見えてきて、さらには心理学独自の多様な方法論を俯瞰的に眺められるかと思えます。また、実験（法）は心理学成立の歴史とも深い関係がありますので、これらについて $+\alpha$ の考察をしてみることもよいかもしれません。

参考図書

課題1：金城辰夫編『図説現代心理学入門』培風館、1996年（「心理学概論」の教科書改訂版 p.94～97・三訂版 p.142～145）

課題2：市川伸一 編著『心理測定法への招待』（新心理学ライブラリ 13）サイエンス社、1991年

ほか、心理学研究法・心理測定などに関する本、または心理学の教科書で「測定や研究法」に関する箇所など。

課題3：丸山欣哉編『基礎心理学通論』福村出版、1996年
椎名健著『錯覚の心理学』講談社現代新書、1995年
梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監修『新版 心理学事典』平凡社、1981年

<http://www.brl.ntt.co.jp/IllusionForum/basics/index.html>（ホームページ「錯覚とは何か」）

<http://www.ritsumeai.ac.jp/~akitaoka/>（ホームページ「北岡明佳の錯視のページ」）

<http://psywww.human.metro-u.ac.jp/sakusi/>（ホームページ「錯視の広場」）

課題4：南風原朝和・市川伸一・下山晴彦編『心理学研究法入門』東京大学出版会、

心理学実験Ⅱ

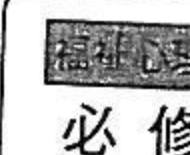
科目コード●050506

担当教員●村井則子・西野美佐子
白井秀明・中村修

2単位

SR

2年以上



2001年

小牧純爾著『心理学実験の理論と計画』ナカニシヤ出版、2000年

利島保・生和秀敏編著『心理学のための実験マニュアル』北大路書房、1993年

宮原英種・宮原和子監修 加知ひろ子・武藤幸穂著『心理学実験を愉しむ —

心理学の「日常性」と「科学性」』ナカニシヤ出版、2003年

大山正・中島義明編『実験心理学への招待』(新心理学ライブラリ 8)サイ

エンス社、1993年

中島義明著『実験心理学の基礎』誠信書房、1992年

B. フィンドレイ著 細江達郎・細越久美子訳『心理学実験・研究レポートの

書き方』北大路書房、1996年

スクーリング受講上の注意

筆記用具、定規(グラフを書くのに使用)、4色ボールペン(色鉛筆)、電卓を持参してください。

「心理学実験Ⅰ」「心理学実験Ⅱ」については、原則としてⅠ→Ⅱの順に受講してください。なお、『福祉心理学科 スタディ・ガイド』(東北福祉大学)で「心理学実験」の概要を予習しておいてください。

平成20年度レポート提出期限

実験レポート(4課題とも) 8月22日必着

単位認定レポート 12月24日必着、9月卒業希望者は8月末必着

(再提出レポートは上記以降も提出可)

10月生科目等履修生が今年度中の単位修得を希望する場合、および10月以降の休学予定者は、単位認定レポートを9月末までに提出し合格する必要があります。

科目の内容

心理学は行動科学の一分野であり、どのような条件の下でどのような行動が生じるか、あるいは、ある行動はどのような条件で起こったのかなどということ明らかにしようとしています。そのための方法にはいくつかありますが、実験法もその一つです。

科学的知識とは、客観的事実として実証されたものをいいます。心理学では、特定の要因(独立変数とよびます)を系統的に変化させ、意識や行動(従属変数)がどのように変わるかということ明らかにしようとする手法があり、これを実験法とよんでいます。条件を厳密に統制するということに実験法の特徴がありますが、心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、さまざまな角度から、この実験法について、その基礎を学ぶことを目標とします。

教科書

テキスト(プリント)は、スクーリング時に配布します。

授業の進め方

心理学実験Ⅱでは、下記の4つの実験を体験します。受講生を4グループに分け、1グループ1種目ずつ、①実験についてのオリエンテーション、②実験の実施、③データの整理・分析、④レポート作成という一連の作業を行います。翌日は、別の種目を経験し、4回ローテーションして全種目を終わることになります。

▶実験1「系列学習法」(村井則子 担当)

記憶研究の先駆者といわれるエビングハウスが用いた伝統的な実験材料である無意味綴りを用いて、言語学習実験の代表的な3タイプのうち系列学習法(ある順序で呈示された無意味綴りとその順序どおり覚えさせる実験法)を実習し、系列位置効果(呈示された刺激がはじめの方にあるか、終わりの方にあるか等で学習しやすさに差があること)について調べます。